『みだれ髪』論――与謝野鉄幹と山川登美子――

山崎　ひかり

初めに

明治時代、「温良従順で、貞操かたく、親や夫にさからわず、嫉妬をつつしみ、家にこもって育児に専念する、それが女の美徳」[注一]であった。上田敏は当時の状況について「風景は世の常の「畫らしき」山川に限り、人情は咎めなき君臣、父子のきはに止りて、熱情の溢るるなく、深沈の反抗無く、疑惑の終局を究め盡さむ勇猛力なくして、巾幗者流の思想に媚ぶる」[注二]と痛烈に批判しているが、これが歌を詠む者の共通認識であったのである。女は一歩引いた存在でなければならず、歌を作るうえでの決まり事のようなものがあった時代に、官能的な表現で激しい恋愛感情を詠った歌集が誕生した。それが、与謝野晶子の第一歌集『みだれ髪』（東京新詩社・伊藤文友館、明三四・八）である。

『みだれ髪』の出版は、その官能性から、世間に多大な衝撃を与え、賛否両論様々な意見が寄せられた。『みだれ髪』について、小田切秀雄は「近代短歌史上においてもっとも光栄ある瞬間の一つは、二二歳のうら若い女性の手に成った歌集『みだれ髪』の出現のときである。」[注三]とし、「青春の携えて来た匂わしい歌が、『みだれ髪』を満たしていた。青春はときに老衰者のような顔をしていることがあるがここではまさにその反対に、青春の名に真にふさわしい力と情熱と明るさにあふれた、まことに緑なす青春であった。」[注四]と述べている。また、日夏耿之介は「初期の代表歌品『みだれ髪』のごときも、ともすれば處女的作品の物珍らしきその異色すら、あつさりその幼稚未熟と浪曼的古風との故を以て荒々しく擯け去られてしまつた。」[注五]と同時代の評価の低さを述べている。好意的な意見だけではなく批判的な意見も多くある『みだれ髪』は、晶子自身「芸術としては未完成な部分が多い」[注六]と「嫌がった」[注七]。『みだれ髪』に収められている歌について、晶子は「唯だ歌ひたいから歌ふと云ふ風で何の反省もせずにゐたのですから、自分の歌が何う云ふ質を持ち、

何う云ふ社會的價値を持つて居るかも考えずに居ましたが、今から思ふと、幼稚な歌が多くて赤面する許りです。」[注八]と述べている。にも関わらず、『みだれ髪』は後世に語り継がれ、今なおその知名度は決して低くない。その理由は、『みだれ髪』が当時の風潮に囚われず、「なまのままの女性の感情を歌い上げた」[注九]作品であるからだと考えられる。

本稿では、『みだれ髪』成立の背景にある与謝野鉄幹との恋愛、また山川登美子との関係に目を向け、『みだれ髪』の成立に欠かせなかった鉄幹と登美子が晶子にとってどのような存在だったのかを考察し、晶子にとって「恋愛」とは何かについて、明らかにしていきたい。

1. 登美子という存在

登美子は明治一二年七月、福井県遠敷郡竹原村に生まれた。兄が二人と姉が三人、後に弟が二人生まれているので、八人兄弟の四女にあたる。登美子の実家は代々小浜藩主酒井家の重臣として名の高い旧家であり、父の山川貞蔵は七代目当主であった。封建的家風の中で育った登美子だが、幼い頃からしっかりとした教育を受けており、小浜の雲城高等学校を優秀な成績で卒業した後、明治二八年、一六歳のときに大阪の梅花女学校に入学した。梅花女学校に入学する前は、約一年の間、師匠について和歌を詠んだり、字を習ったり、琴を弾いたり、花を活けるなど、旧家の少女らしい教養を受けていた。実家の教養により、少女の頃から歌を詠んでいた登美子だったが、歌人になることは考えていなかった。明治三三年五月の『明星』第二号に初めて登美子の歌が掲載されてから以後毎号歌を発表していくが、登美子は歌人ではなく画家を目指しており、美術学校への進学を目指していたようである。しかし、その道は父や姉に反対され、断念せざるを得なかった。[注一〇]登美子の進む道は自然と一つに絞られていった。

明治三三年八月三日、登美子は講演会のために大阪を訪れていた鉄幹に初めて出会った。東京新詩社を設立し、『明星』の主宰だった鉄幹のことを登美子は知っていたが、会う前は鉄幹に対して特別な感情を抱いてはいなかった。むしろ登美子を気にかけていたのは鉄幹の方で、『新聲』や『文庫』に掲載された登美子の歌を見て『明星』の歌人にさせ

ようとしていたと考えられている。[注一]登美子が晶子と出会ったのはその後のことで、それは鉄幹の紹介によるものだった。後に『明星』を代表する女性歌人となり、恋のライバルとなる二人が、鉄幹によって初めて対面することになったのである。知的で短歌への情熱溢れる鉄幹を二人は師として慕い、どんどん傾倒していった。西尾能仁によると、「登美子の方が晶子よりより積極的であったように思われる」[注二]と述べており、その理由として登美子は鉄幹の講演会に全部出席していること、八月九日の夜に住吉で鉄幹に会いたいと申し出ていること（実際には晶子も一緒だった）、同じく九日の夜、晶子を先に堺に帰らせた後、鉄幹と二人で梅田駅まで同行したことを挙げている。[注三]鉄幹に初めて出会ってから間を空けず、積極的に会いに行っているところを見ると、登美子も晶子と同様、鉄幹に一目惚れに近い感情を抱いたと考えられる。晶子とは恋のライバルであったわけだが、登美子は自分が鉄幹に会う時は晶子のことも誘い出していたようである。名高い旧家の娘として育った登美子としては年上を敬う気持ちもあっただろうが、それ以上に同じ人を慕う者同士惹きつけられるものがあったのかもしれない。

登美子は鉄幹に出会ってから、より一層真剣に歌に取り組むようになり、時には鉄幹への思いを歌にすることもあった。

兄ぎみとよばむも神のとがありやそのみ使のほしのまな子を（『関西文学』第二号、明三三・九）

あたらしくひらきましたる歌の道に君が名よびて死なむとぞ思うふ（『明星』第七号、明三三・一〇）

鉄幹に出会い真剣に歌の道を志すようになった登美子は、鉄幹を師と慕い、短歌革新を目指していた鉄幹にどこまでもついて行きたいと思っていた。右の二首は、鉄幹に対する敬意の念と、進むべき道を見つけた登美子の覚悟が感じられる。

戀として世にのこさばや立ち濡れし松の木蔭の合傘の君（『明星』第八号、明三三・一一）

こゝに君しのび泣く子の二人あり百二十里を遠しと思すな（同）

その人の袖にかくれん名もしらず夢に見し戀あゝもろかりき（同）

うす紅の芙蓉の花に露をつゝみ成らば女神の髪にそゝがむ（『小天地』第二号、明三三・一一）

姉君の鬢のほつれを掻きあげて戀歌弄ずる男にくしや（同）

いつしか登美子は鉄幹に対して師弟の関係を飛び越えた感情を抱くようになり、そのどうにも出来ない思いを歌に込めた。「こゝに君……」の歌の「二人」とは登美子と晶子のことを示していると思われる。晶子も自分と同じように鉄幹のことを思っていることを登美子は十分理解したうえで、自分の思い、そして晶子の思いをも表していると考えられる。また、「姉君の……」の歌の「姉君」は晶子のことを示しており、「戀歌弄ずる男」は鉄幹のことであると思われる。これは登美子の嫉妬心が分かりやすく表れた歌であるが、何も着飾ることなく自分の感情をぶつけている点は晶子のようである。やはり自分と同じ時期に『明星』に歌を発表し、優れた才能を持っていた晶子の歌を登美子は少なからず意識していたのではないだろうか。

晶子も登美子に負けじと、鉄幹を思う歌をどんどん発表した。

病みませるうなじに纖（ほそ）きかひな捲きて熱にかわける御口を吸はむ（『明星』第六号、明三三・九）

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆかりを歎きつつ死なむ（同）

わが歌に瞳のいろをうるませしその君去りて十日たちにけり（『関西文学』第二号、明三三・九）

わかき子が胸の小琴の音を知るや旅ねの君よたまくらかさむ（同）

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君（『明星』第七号、明三三・一〇）

水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや君（同）

「君」とは鉄幹のことを示す。鉄幹への思いをぶつけるためだけに詠まれたような、素直で大胆な歌である。登美子の歌と比べてみてもその大胆さが窺える。晶子はただ鉄幹を思う歌を詠んだだけであろうが、歌を詠むうえで少なからず登美子の存在を意識していたのではないだろうか。

しかし、登美子の思いが叶うことはなかった。登美子の父貞蔵が登美子の結婚の話を進めてしまったことで、登美子と同郷の山川駐七郎との結婚が決まったのである。登美子は明治三三年一一月、鉄幹と晶子と三人で栗田山に宿泊したのを最後に故郷に帰って結婚することを決意した。

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ（『明星』第八号、明三三・一一）

これは登美子が、鉄幹と晶子と別れた後の歌である。この歌からは、晶子に鉄幹を取られたという悲しみではなく、鉄幹への思いはもう二度と叶うことはないという現実に対する悲しみを強く感じる。登美子は実質的に恋の敗者になったのである。登美子は結婚をしたことで歌から離れたが、晶子はそんな登美子に対し

ひと花はみづから溪にもとめきませ若狭の雪に堪へむ紅（『明星』第一二号、明三四・五）

魔のわざを神のさだめと眼を閉ぢし友の片手の花あやぶみぬ（『みだれ髪』、明三四・八）

などと歌い激励している。恋の勝者となった晶子の心の余裕もあっただろうが、登美子の才能を理解していた晶子だからこそ、女としてではなく歌人として詠んだ歌なのではないだろうか。

その後、登美子と晶子の人生ははっきり明暗が別れる。登美子は明治三四年一二月に駐七郎を結核で亡くし、自身も明治四二年の四月に結核で亡くなってしまう。一方晶子は様々な壁を乗り越え好きな人と結婚し、『みだれ髪』の刊行によって歌壇での地位を確立していき、多くの子供にも恵まれる。二人の人生は全く違った形で幕を閉じたが、「歌に生きた」という点は同じである。

『みだれ髪』の第三章にあたる「白百合」は、まるで登美子との思い出が語られているようである。処女詩集の貴重な一章分の題名を登美子の雅号にし、登美子に関する歌や登美子に宛てた歌を多く収めていることから考えても、晶子にとって登美子は恋愛に関しても歌に関してもライバルであったが、それ以上に友人という意識が強かったのではないだろうか。

友は二十ふたつこしたる我身なりふさはずあらじ戀と傳えむ（『明星』第一一号、明三四・三）

と詠んだ晶子の気持ちは決して嘘偽りのないものである。登美子がいなければ『みだれ髪』の成立はなかったと言っても過言ではないのではないだろうか。

2. 晶子に出会う以前の鉄幹

次に、晶子にとってもっとも重要な人物である、与謝野鉄幹（一八七三～一九三五）を取り上げる。

鉄幹とは雅号であり、本名は与謝野寛という。住職である父礼厳とその妻初枝の間に生まれた。三人の兄と一人の弟・妹がいる。父礼厳は偉大な人物で、住職を勤める傍ら国事に参与し、人智の開発、産業の振興、窮民施薬などの公共事業に尽力するなどしており、逸見久美は礼厳を「維新のかくれた功労者」[注一四]と称している。母の初枝は礼厳とは不仲であったが、礼厳の生き方を十分に理解しており、誇りを持って夫に仕えていた。家族の生活は二の次で、自分の思うままに生きていた礼厳だったので仕送りがなく、常に貧しい生活を送っていたが、子供たちの教育には真剣に取り組んでいた。気性が激しく強い性格をしており、鉄幹はそんな初枝の元で厳しい教育を受けていた。鉄幹は初枝から「常にますらをのように雄々しくなれ」と教えられており、逸見久美はそこに「寛のますらをぶりの提唱の根源があったように思われる」[注一五]と述べている。鉄幹は礼厳の思いを形にする行動力を受け継ぎ、初枝の教えをしっかり吸収して成長したのである。

鉄幹は成績優秀で、幼い頃から学ぶことに貪欲であった。それは初枝の影響もあったのだろうが、自ら多くの書物を読み、時には自分より年上の人に勉強を教えることもあったという。そのような幼い頃からの取り組みが鉄幹の能力を伸ばしていったと考えられる。明治二二年から二五年にかけて、鉄幹は仲兄赤松照幢の住職であった徳応寺で過ごしていた。そして照幢夫妻が経営していた徳山女学校の国漢の教師をしながら、自らも歌や詩を詠んだり雑誌の編集を手掛けたりもしていた。さらには照幢が購入していたという新文学書を読み、新文学に傾倒した。特に落合直文と森鴎外の文章に感激し、この頃の新文学への傾倒が鉄幹の短歌革新の道への第一歩となったと考えられる。

鉄幹が歌を詠むようになったのは、礼厳の影響が大きいと考えられる。礼厳は作歌の手本として、詩経と易と『万葉集』を根本とし、それが身についたら『古今集』以下近世の集も読むように教えたが、鉄幹は『万葉集』を手本とし、ひたすら万葉調を模倣していた。しかし、前述した直文や鴎外の影響もあってか、鉄幹はいつしか「模倣ではない、新

しい歌を作りたい」と思うようになり、上京後直文の門下となり、直文の紹介で鴎外とも知り合いになった。そして直文を中心に浅香社を創設し、鉄幹はそこの最前線で活躍した。さらに明治二七年には「亡国の音」を発表し、旧派歌人を批判している。万葉調から脱し、模倣ではない独自の歌を作ることを目指した鉄幹の思いが徐々に形になっていっている証である。

しかし、鉄幹は浅香社で活躍していたにも関わらず、三度も渡韓している。

第一回目の渡韓は明治二八年四月から一〇月にかけてであるが、その目的は「政治的野心（やしん）」[注一六]と「日本文学や日本唱歌を教えて日本精神をうえつけよう」[注一七]としていたためである。浅香社にいた頃ともに活躍していた直文の弟、鮎貝槐園が総長を務めている乙末義塾の教師になった。鉄幹の第一詩歌集『東西南北』（明治書院、明二九・九）に

かの国に赴く途次、大坂を過ぎ、中の島の豊公の祠を拝して、よめる。此行実にかの国学部衙門の教官として、日本語の教授を担当するもの也。

きこしめせ。御国の文を、かの国に、
今はさづくる、世にこそありけれ。（初出未詳）

と詠んだ歌があり、鉄幹の野望が感じられる。しかしこの渡韓は乙末事件の勃発による乙末義塾の廃校で失敗に終わった。

第二回目の渡韓は明治二八年一二月から明治二九年三月にかけてである。第一回目の渡韓から間を開けずに渡韓しているが、その目的は第一回目とは異なり商売をするためであった。

廿八年十二月、再び朝鮮に航するや、槐園と共に、身を商界に投ぜむとの念、切なり。万葉集二度まで浄写したる筆もて、大福帳つくるも亦、風流ならずと云はむやなどいふ。

世の中の、黄金のかぎり、身につけて、
まだ見ぬ山を、皆あがなはむ。（初出未詳）

末の世は人の、国さへ、売られけり。

たふときものは、黄金ならずや。（初出未詳）

『東西南北』では右のような歌が詠まれている。親日派の勢力を挽回するため、志士たちと計りごとを実行しようとしたが未遂で終わり、商売も失敗に終わった。二回目の渡韓も鉄幹の目的が果たされることはなかった。

最後の渡韓は明治三〇年七月から明治三一年四月にかけてである。この渡韓の目的は二回目と同様に商売をすることであったが、これも上手くいかなかった。しかし、この渡韓では鉄幹の心情に変化が生まれた。それまで抱いていた「政治的野心」と商売への強い欲求がなくなり、朝鮮での生活を芸妓との遊戯にあてるなどしていた。この生活の変化から、鉄幹の歌の特徴も変化した。『東西南北』には鉄幹の渡韓にまつわる歌が多く収められており、明治二九年に創刊された。様々な人物が序文として『東西南北』に文章を寄せている。鉄幹が師と仰ぐ落合直文は、

〈前略〉鉄幹は、わが浅香社の社友なり。社友三十名前後、いづれも、その歌に、一種の特色を備え居るが、鉄幹の如きは、雄々しき調を以てまさるものか。〈中略〉鉄幹の歌を見るに、桂川あらし山は見終りて、深く白河にさかのぼり、たかく比叡の山にのぼらむとするもの、如し。その志、壮とやいはむ、快とやいはむ。[注一八]〈後略〉

と述べている。また、小中村義象は、

今の世の歌は、大よそ、二つにわかれたるがごとし。その一つは、詞をも心をも、古めかしく、よみ出づるものにして、その一つは詞をも心をも、なるべく、今やうに、よみ出でむとするものなり、されば、一つは賀茂川の流をたどり、一つは香川の雫をくめりなど、人はいふめり。さはいへ、共に一つの形式を守りたれば、新調といふも、必しも新ならず。いひもてゆけば、一つ道におつめり。こゝに、我友与謝野寛氏は、常に今の世の歌の、吟ずるに足らざるを憤りをる人なるが、この頃尋ねきて、議論は功少し、我は、わが思ふところあれは、みづからの歌を、世に公にせむとす。いかで、一こと添へずやといふ。見るに、その集の名の、東西南北といふさへ、めづらしきに、よみ出でられたる長歌短歌など、その体、全く、今の世の歌人の流と異なり。この書、一たび世に出でなば、ほむる人、そしる人、その議論いくばくぞ。[注一九]〈後略〉

と述べている。さらに、鉄幹は「自序」において、

〈前略〉小生の詩は、短歌にせよ、新体詩にせよ、誰を崇拝するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御坐候ふ。〈中略〉小生は、詩を以て世に立つ者にあらず候へども、短歌にもあれ、新体詩にもあれ、世の専門詩人の諸君とは、大に反対の意見を抱き居る者に御坐候ふ。されど、最早議論の時代にあらずと心得候へば、申し述べず候ふ。[注10]〈後略〉

と述べている。これらの序文から、鉄幹の「雄々しき調」は、「今の世の歌人の流」と全く異なっており、短歌革新を目指し万葉調を脱しようとした鉄幹の新しい試みであることが窺える。『東西南北』では「雄々しき調」を象徴するモチーフとして、「太刀（刀・剣）」や「虎」、「益荒男（ますらを）」などがある。

京城に秋立つ日、槐園と共に賦す。時に、王妃閔氏の専横、日に加はり、日本党の勢力、頓に地に墜つ。

韓山（からやま）に、秋かぜ立つや、太刀なでて、
　　われ思ふこと、無きにしもあらず。（初出未詳）

から山に、吼ゆてふ虎の、声はきかず。
　　さびしき秋の、風たちにけり。（初出未詳）

この歌を、おなじやうにて、鎌倉に遊び居れる、槐園がりおくりたるに、いまだ死ぬべき時にはあらず、新体詩出来たならば、見せよなど、走り書きして、次の一首をつづけたり。

風の音に、おどろかされて、益荒男の、
　　夢やすからぬ、秋は来にけり。（『二六新報』「くすりぶくろ」、明二七・一〇）

諸友と、京城の南山亭に飲みて、席上大木書記生と賦す。

琵琶をとれ。我れ新体の、歌なりぬ。

かの益荒夫に、酒はすすめよ。（初出未詳）

或鏡道の千仏山にて。

尾上には、いたくも虎の、吼ゆるかな、

夕は風に、ならむとすらむ。（初出未詳）

二月廿八日、京城を出づ。何の未練、この国にありてか、往復は、二箇月と、ことわりおくも、可笑し。さすがに、こゝにも、泣く人はありて、やらじ〳〵とぞいふなる。

ますら夫の、腰にまもりの、太刀はあれど、

人のなさけを、いかに断つべき。（『日本』「出頭没頭録」、明二九・三）

明治廿七年五月、朝鮮問題のために、日清両国のこと、やゝ切迫せる折の歌に。

いたづらに、何をかいはむ。事はただ、

此太刀にあり。ただ此太刀に。（『二六新報』「雄たけび（二）」、明二七・六）

二たび、朝鮮より帰りける時。

筆とりて、あらばあるべき、おのが身を、

太刀にかへてと、何おもひけむ。（『日本』「出頭没頭録」、明二九・四）

以上が「太刀」や「虎」、「益荒男」がモチーフの歌である。落合直文が「雄々しき調」と述べたこれらの歌は「丈夫調」や「虎剣調」と称された。鉄幹の渡韓や日清戦争が背景としてある『東西南北』は「戦争を賛美し、士気を鼓舞し、大勝利をめざして国民意識を昂揚せしめた」[注二]詩歌集として支持され、鉄幹は「虎の鉄幹」と呼ばれた。『東西南北』は

短歌革新を目指していた鉄幹にとって大きな意味を成す作品となったことは間違いなく、短歌界にとっても新しい風が吹いた一作品となったのである。

鉄幹は三回における渡韓後は文学の道に専念するようになり、『東西南北』の後は詩歌集『天地玄黄』（明治書院、明三〇・一）、『鉄幹子』（矢島誠進堂、明三四・三）、『紫』（東京新詩社、明三四・四）が刊行されている。しかし、『東西南北』に見られた「丈夫調」や「虎剣調」はどんどん影を潜めていき、鉄幹の短歌革新の野望は『東西南北』で満足されることなく、常に短歌界の進化を目指していたと考えられる。

そして、『天地玄黄』が創刊されてから『鉄幹子』が創刊されるまでに、鉄幹はある一人の女性と出会った。その女性との出会いが鉄幹の人生を変え、短歌界にも新しい風を吹かせることになる。

3．晶子にとっての鉄幹

鉄幹と晶子が出会ったのは明治三三年八月三日で、第一節でも軽く触れたが、鉄幹と晶子と登美子は同じ日に初めて出会っている。

晶子は「晶子歌話」において、「歌や俳句の書物をも讀んでは居ましたが、其等のものは到底紫式部の小説や近松の戯曲に比較するだけの價値の無いものだと思つて、寧ろ輕蔑して居ました。其時は歌と云ふものを自分から可なり遠い距離に置いて眺めて居たのでした。」[注二二]と述べており、かつては歌を詠むことを敬遠していたことが窺える。しかし、その後で「私は青春の日の愛に目覺めたのです。」[注二三]とし、「私の内心に起つた新しい衝動を以て、何かの創造を藝術的に實現したくてならなかつたのです。その時、俄に私の必要を滿たしたものは歌でした。」[注二四]と述べている。つまり、晶子は自分の心の内を「藝術的」に表現する手段として歌を詠むことを選んだのである。ではなぜそれまで敬遠していた歌を選んだかというと、「明治三十年頃の「讀賣新聞」で與謝野の歌を讀ん」[注二五]だことがきっかけである。

太宰春臺の随筆の「獨語」を讀むと、春臺は初めに歌を作りましたが、堂上の家風の窮屈なのを見て、之は到底

自分の感情を自由に歌ふことの出來ないものだと氣が附いて、斷然歌を止めて漢詩の方へ移つて行つたと書いて居ますが、私も歌と云ふものが春臺の考へたやうに窮屈な修辭上の制約があつたり、また明治の舊派の歌のやうに獨創の無い、進歩の無い、平凡陳腐な、回顧的、常識的、概念的、類型的、非熱情的な題材の範圍にのみ停滞して居るものであつたりするならば、全く歌を蔑視して、――丁度私が早く琴の稽古を止めて仕舞つたやうに――再び其れを顧みなかつたに違ひありません。

然るに與謝野の歌は偶々私を刺戟して、歌に對する私の態度を一變させました。

與謝野は確に明治の歌に於る因習思想の破壞者でした。舊派の歌學に囚はれて、その歌學の追隨者の間にのみ獨占されて居た歌を、兎にも角にも一般民衆のために、解放して、各人の個性の産物であることを教へて呉れたのは與謝野でした。

明治三十三年に與謝野と其友人達とが新詩社を結んで雜誌「明星」を發行するに及んで、歌の積極的改革者たる與謝野の態度は益々鮮明になりました。與謝野は自身の歌を雜誌の上で發表するのに特に「小生の詩」と題して、内容も形式も古來の型に由ることなく、偏に個人々々の獨創的實感に立脚すべきことを主張しました。[注二六]

それまで晶子にとって歌はただ形式にこだわるばかりで全く魅力的ではなかったが、鉄幹の歌を見たことでその考えは変わり、自分の感情を思うままに歌にすることは何も間違ったことではないのだと、歌に対する可能性を感じた。短歌革新を目指し自己流の歌を作ろうと試みた鉄幹に晶子は共鳴し、鉄幹が主宰の『明星』に参加した。晶子が初めて鉄幹の歌を見た明治三〇年はまだ鉄幹と晶子は直接的な面識はなかったが、鉄幹の歌を見て心打たれた晶子は、顔も見たことない鉄幹に憧れの気持ちを抱いたと考えられる。

鉄幹に出会い、晶子の気持ちに火が付いた。知り合う前から抱いていた憧れの気持ちは最早憧れだけにとどまらず、恋愛感情に発展した。本稿の第一節で既に述べたが、晶子は鉄幹への思いを全て歌にした。歌に形式があることに納得せず、鉄幹が作った自己流の歌に感銘を受けた晶子は、ありのままの気持ちを歌にすることで、晶子も自己流の歌を作り上げようとしていたのである。鉄幹に出会う以前、晶子は堺敷島会に所属していたので、晶子の歌についての知識と

技術はある程度そこで培われたと考えて間違いない。しかし、敷島会は旧派の歌会であったため、歌を詠み始めた頃の晶子の歌は型にはまったものであった。

ふるさとのあれし軒端の立花に昔の人そこひしかりける[注二七]（『堺敷島会歌集第四集』、明二九・六）

恋わふる胸の煙をよそにすむむろのやしまの秋の夜の月[注二八]（『堺敷島会歌集第七集』、明二九・九）

大空にたちまふ田鶴はもろこゑに君か千とせを呼かはすらん[注二九]（『堺敷島会歌集第拾壱集』、明三〇・二）

以上三首は晶子が敷島会の歌集に掲載した歌の中から取り上げたものだが、恋愛がテーマとなっている歌ではあるものの、『みだれ髪』に収められた恋愛の歌と比べると大胆さは皆無であることが分かる。そんな晶子の歌は、明治三〇年に鉄幹の歌と出会い、さらに明治三三年に鉄幹本人と出会ったことで大きく変化し、大胆さが増した。

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩に有りとも思ふ（『明星』第八号、明三三・一一）

歌は君醉ひのすさびと墨ひかばさても消ゆべしさても消ぬべし（同）

もゆる口になにを含まむぬれとひし人のをゆびの血は涸れはてぬ（『明星』第九号、明三三・一二）

といったように、鉄幹に愛の告白をしているような歌もあれば、

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿は秋寒かりき（『明星』第九号、明三三・一二）

その血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春を山蓼（やまたで）たづねますな君（『明星』第一二号、明三四・五）

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき御肩に春の日よわき（同）

といったように、自分ではない他の女性のことを考えている鉄幹に対する恨みの気持ちや嫉妬心を表現した歌もある。晶子が『堺敷島会歌集』に掲載した歌と比べると「口」や「肩」、「血」などの身体的なモチーフが多く使われており、その大胆さと情熱が窺える。

鉄幹に出会った後、晶子は『明星』により多くの歌を掲載するようになった。『関西文学』や『小天地』『新調』『文庫』など、当時晶子が歌を掲載していた雑誌は『明星』の他にもあったが、これらの雑誌には一～三首ほどしか掲載していないにも関わらず、『明星』には多い時で六〇首を超える歌を掲載している。数字で見ると、約二〇倍の開きがあ

り、晶子がどれだけ『明星』に力を注いでいたかが窺える。島津忠夫はこのことについて、

これらの歌稿は『明星』への投稿ということよりも、『みだれ髪』編集のために、晶子から鉄幹へ送られて来る歌を、鉄幹が一方では『みだれ髪』を編みつつ、一方では『明星』に適当に選んで掲載したといったことではなかったか。[注三〇]

と述べている。歌集を作ろうとした鉄幹の思いに晶子は全身全霊で応えようとしていたのではないだろうか。

そう考えると、『紫』は『みだれ髪』の先駆的役割を果たしていると見て良いと思われる。明治三四年四月、鉄幹は第四詩歌集として『紫』を創刊した。「丈夫調」・「虎剣調」が目立った『東西南北』の創刊から約五年の月日が流れていた。『紫』に収められた歌を見てみると、

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだえの子（『明星』第一一号、明三四・三）

恋といふも未だつくさず人と我とあたらしくしぬ日の本の歌（『小天地』、明三四・二）

秋かぜにふさはしき名をまゐらせむ『そぞろ心の乱れ髪の君』（『明星』第八号、明三三・一一）

あな寒むとたださりげなく云ひさして我を見ざりし乱れ髪の君（『明星』第九号、明三三・一二）

といったように恋愛の歌が多く、「丈夫調」・「虎剣調」のような雄々しさは見られない。ここで詠まれているのは「歓喜に満ちた恋の陶酔と感激」[注三一]であり、「自意識の強い浪漫的精神の高揚」[注三二]である。鉄幹が目指した短歌革新は、晶子と出会ったことで形を変え、その思いはやがて晶子にも受け継がれていった。『紫』の創刊から約四ヶ月後、ついに晶子の『みだれ髪』は創刊された。鉄幹が『紫』で示した恋愛による自我の解放は『みだれ髪』によって確立され、短歌界だけではなく世界中に衝撃を与えた。それは旧派短歌への挑戦であり、自分自身への挑戦である。そして『紫』がなければ『みだれ髪』はなく、鉄幹がいなければ歌人・与謝野晶子はいなかった。鉄幹はまさしく歌人・与謝野晶子を作り上げた人物であり、そこに晶子の恋愛の本質があるのではないだろうか。

終わりに

晶子は「人及び女として」の中で「妻の意義」と題して次のように述べている。

私共の結婚は媒酌人が先に立つて居ない、二人の愛の交感と思想上の理解が先になり基礎になつて居ります。雙方の靈と肉を愛重し合ひ愛重され合ふ關係に由つて對等に協力して生きて行かうとするのが私共の實行して居る結婚生活です。愛の交感も思想上の理解もない男女が、男は女を見くびり、女は男に頼り過ぎて屈従しながら、それで良人であり妻であると云ふことは私共の堪へ得ない所です。[注三三]

晶子は「内容も形式も古來の型に由ることなく」[注三四]詠まれた鉄幹の歌を見て、自己流の歌を作り上げようとしている鉄幹に感銘を受けた。それはまさしく短歌革新を目指していた鉄幹との魂の共鳴であり、晶子が述べている「思想の理解」なのではないだろうか。しかし、晶子が鉄幹に恋愛感情を抱いたことは紛れもない事実であり、鉄幹に出会うまで晶子にとって恋愛は想像の中の出来事だった。ほとんど恋愛とは無縁の生活を送っていた晶子は、鉄幹に出会い、いつしか歌人としてではなく一人の男性として鉄幹を思うようになった。それは晶子にとって自我の目覚めであり、それを表現するための手段として歌があったのではないかと考えられる。また、登美子も歌人・与謝野晶子にとって重要な存在だった。時には鉄幹を取り合う恋のライバルとして、時には『明星』を代表する女性歌人として、晶子と登美子は同じ時間を過ごし、互いに切磋琢磨し合っていた。登美子の結婚で違う道を歩む結果になってしまったが、晶子にとって登美子は、青春の時を共に過ごした唯一無二の存在だったのである。

晶子が鉄幹に出会ってから結ばれるまで、登美子や林滝野など他の女性の問題や、裸体画掲載による『明星』の発禁（明三三・一一）、鉄幹の醜聞を告発した『文壇照魔鏡』事件（明三四・三～四）など、様々な紆余曲折があった。そんな中で何よりも二人を繋げていたのは歌であり「思想」なのではないだろうか。その繋がりは途切れることはなく、生涯続いていた。

こもり居に集の歌ぬくねたみ妻五月のやどの二人うつくしき（『みだれ髪』、明三四・八）

これは人生のパートナーとして鉄幹を選び、鉄幹と共に生きていくことを決めた晶子の、清々しくも強い覚悟が表れている。鉄幹と共に生きることは、歌人として、また女として生きた晶子の至上の喜びだったのである。

注一　『新文芸読本　与謝野晶子』清水勝発行（河出書房新社、平三・六）「「みだれ髪」の女」田辺聖子著（初出：『人物日本の女性史　第一二巻　教育・文学への黎明』集英社、昭五三・二）

注二　『近代文学作品論叢書4　与謝野晶子『みだれ髪』作品論集成Ⅰ』逸見久美編（大空社、平九・一一）「みだれ髪を読む」なにがし（上田敏）著（初出：『明星』第一六号、新詩社、明三四・一〇）

注三　『日本文学研究資料叢書　近代短歌』日本文学研究資料刊行会編（有精堂、昭四八・五）「『みだれ髪』論―近代短歌の光栄―」小田切秀雄著（初出：『古典研究』昭和一四年一〇号）

注四　注三と同書

注五　『近代文学作品論叢書4　与謝野晶子『みだれ髪』作品論集成Ⅱ』逸見久美編（大空社、平九・一一）「与謝野晶子　みだれ髪の浪曼的感覚」日夏耿之介著（初出：『明治大正詩人〈要選書5〉要書房、昭二五・七）

注六　『晶子と寛の思い出』与謝野光著（思文閣出版、平三・九）

注七　注六と同書

注八　『定本　與謝野晶子全集　第十三巻　短歌評論』与謝野晶子著（講談社、昭五五・四）「歌のつくりやう」（初出：『歌の作りやう』与謝野晶子著、金尾文淵堂、大四・一二）

注九　注六と同書

注一〇　『山川登美子』竹西寛子著（講談社、昭六〇・一〇）

注一一　『晶子・登美子・明治の新しい女―愛と文学―』西尾能仁著（有斐閣、昭六一・八）

注一二　注一一と同書

注一三　注一一と同書

注一四　『評伝・與謝野鐵幹晶子』逸見久美著（八木書店、昭五〇・四）
注一五　注一四と同書
注一六　注一四と同書
注一七　注一四と同書
注一八　『鉄幹晶子全集1』与謝野寛著（勉誠出版、平一三・一二）『東西南北』
注一九　注一八と同書
注二〇　注一八と同書
注二一　注一四と同書
注二二　注八と同書。「晶子歌話」（初出：『晶子歌話』天佑社、大八・一〇）
注二三　注二二と同様
注二四　注二二と同様
注二五　注二二と同様
注二六　注二二と同様
注二七　『鉄幹晶子全集別巻2』与謝野寛・与謝野晶子著（勉誠出版、平二八・五）
注二八　注二七と同書
注二九　注二七と同書
注三〇　『近代文学作品論叢書4　与謝野晶子『みだれ髪』作品論集成Ⅲ』逸見久美編（大空社、平九・一一）「みだれ髪の成立と鉄幹・晶子」島津忠夫著（初出：『国語国文』第四七巻第一〇号、京都大学文学部国語學国文学研究室・中央図書出版、昭五三・一〇）
注三一　注一四と同書
注三二　注一四と同書

注三三　『定本　與謝野晶子全集　第一五巻　評論感想集二』与謝野晶子著（講談社、昭五五・五）「人及び女として」（初出：『人及び女として』天弦堂書房、大五・四）

注三四　注二二と同様

※テキストとしては『定本　與謝野晶子全集　第一巻　歌集一』（与謝野晶子著、講談社、昭五四・一一）と併せて『新みだれ髪全釈』（逸見久美著、八木書店、平八・六）を用いた。なお、本稿中の晶子の引用歌は全て『新みだれ髪全釈』によるものであり、表記は変えずそのまま引用した。

※本稿中取り上げた山川登美子の歌について、引用は主に『明治文學全集51　與謝野鐵幹與謝野晶子集　附明星派文學集』（与謝野鉄幹他著、筑摩書房、昭四三・五）によるものであるが、これに記載のないものは『山川登美子』（竹西寛子著、講談社、昭六〇・一〇）や『晶子・登美子・明治の新しい女―愛と文学―』（西尾能仁著、有斐閣、昭六一・八）から引用した。

※本稿中取り上げた与謝野鉄幹の作品について、『東西南北』所収の歌の引用は全て『鉄幹晶子全集1』（与謝野寛著、勉誠出版、平一三・一二）によるものであり、『紫』所収の歌の引用は全て『鉄幹晶子全集2』（与謝野寛・与謝野晶子著、勉誠出版、平一四・八）によるものである。表記は変えずそのまま引用した。

※取り上げた作品の最後には必要に応じて初出を明記し、（）でくくった。

※本稿で記載した鉄幹の略歴は『評伝・與謝野鐵幹晶子』（逸見久美著、八木書店、昭五〇・四）を参照した。